

月刊

# いじろのとも

第十一卷

二月号

## 自分に閉じた現代人

他人の痛みが

わからない

他人の悲しみが

わからない

他人の喜びも

わからない

でも

自分の痛みには

とても敏感

自分の悲しみには

とても敏感

自分の喜びには

とても敏感

## 父への尊敬喪失

子どもたち

父への尊敬

失いて

規範守れぬ

人に育ちぬ

# 人生を考え直して

## みたい人は（七三）

『正法眼蔵』解説（一七）

有時の巻を続けます。

去来（こらい）の方跡（ほうせき）あきらかなるによりて、人これを疑著（ぎぢやく）せざれども、しれるにならず。衆生もとより、しらざる毎物毎事を疑著すること一定（いちじょう）せざるがゆゑに、疑著する前程（ぜんてい）、かならずしもいまの疑著に符号することなし。ただ疑著しばらく時なるのみなり。

例によつて、現代語訳を参考までに玉城康四郎著『現代語訳正法眼蔵1』（大蔵出版刊）のものを、紹介しておきます。

時間は過去から未来へ流れるという跡かたははっきりしているから、人は、これについて疑つてもみない。疑つてはいないけれども、それを知っているわけではない。人びとは、もともと知らないことを

その都度、疑うだけで、いつこうに定まらない。それゆえに、前の疑いが、かならずしも今の疑いと合致しているわけではない。ただ、疑うということも、時を離れているのではないから、しばらく時であるにすぎない。

現代語訳をご覧いただければ、たいして難しい言葉はありません。でも内容はなかなか深いことをいつているように思えます。

先月号の復習になりますが、時間を理解する上で、大切なことは、時計で測れるような物理的な時間、例えば、春夏秋冬という一年、お日様が出て、沈んでまた出るといった一日、そうした日のまとまりとしての一週間、一カ月、あるいは、ある人が生まれて年取つて死ぬという一生の時間、などは、時間が「来」ては「去」つて行くことが明らかで、誰でもが時間が存在することを知っています。

しかし、時間論で問題として時間を取り上げるとき、この物理的時間と、時間が人間にとってどんな意味をもっているのか、難しく言えば、人間という精神的な存在が人生行路（生きていく上）で「時間という概念」はどんな働きをしているのか、ということとは別のことなのです。

このことを、殆どの時間論者は区別していません。特に、西洋哲学者の時間論はこの部類に入ります。古い仏教者（論師）の中にさえも、そういう人がいますが。

そういう人の時間論は、ほとんど、いわゆる「へりくつ」で、しないほうがよいような時間論ばかりです。

道元がここで、「疑著（ぎぢやく）せざれども、しれるにあらず」といっていますのは、「時間の物理的な特性、つまり一年は三六五日、一日は二四時間、一時間は六十分、一分は六十秒といったように時間が経つことを疑わないけれども、でも、時間を知っているわけではない」と言っているのです。言い換えれば、それは、時の経過は知っているても、この人間の精神の働きとしての時間を知っているわけではない、と言っているのです。

私たちは、時間の経過がどう知覚されるかを知っても、時間の、精神にとつての意味を知ったことにはならないのです。

知ったことにはならないのなら、その都度「時間とは何か」を疑ってみればよいということになります。ところが、衆生、つまり解脱に至らない人は、知らない物事に出会うたびに、「何なのかなあ」と疑ってはみるのですが、その疑いが一定しない（一貫した継続性をもたず、真実性に裏打ちされない）ので、前に疑ったことと、い

ま疑っていることが、食い違って符号しないのです。

それは、私たちが相対な存在だということの現れでもあります。相対な者は、ここで真理と思うことと、あちらで真理と思うことが、一貫しないのです。矛盾していても気づきすらしらないものなのです。現代人のように、自己に閉じて他己を弱め、分裂病的になっていますと、そうしたことは、しょっちゅう出現してしまつて、日常茶飯事となつてしまうのです。そして、それに気づけないのが、他己を弱めた人間の悲しさなのです。

こうなりますと、疑うことが、少しの間、「時間となる」ことに終わつてしまうのだ、ということなのです。

復習ですが、時間とは自己と他己の統合でした。いま、自分が関わつて、見ていることや、起っていることが「何なのか」と疑いをもつこと自体は、自己（未来）の働きです。その疑いを判断する基準となるものが、実は、他己（過去）の働きなのです。自己に閉じていますと、この他己が働きません。つまり、自己の中の基準しかないということなのです。それは、相対なものにとつて、その時その時で、常に不安定に変動することになるのです。

ですから、自己と他己の関わりすら起こらないということになります。時間となる契機は含んでいますが、真の時間となるには至らないのです。

## 自作詩短歌等選

### 絶対な義務を果たせ

欧米人は  
改正不可能な  
絶対的倫理基準を  
持っている  
それは聖書  
ということ  
キリストを信じる者は  
それに従う義務を  
感じているということ  
欧米の憲法は  
聖書の下にあり  
この世を治める  
相対な基準で  
常に  
改正が可能なもの

「平等」は

神の下に  
あらゆる人が  
平等であるところから  
出ており  
「友愛」は  
全ての者を愛する  
神の愛から  
出ている  
「自由」は  
人間の特権として  
神から贈られたもの  
日本人は  
明治になって  
廃仏毀釈で  
仏教の教えを失い  
大東亜戦争敗戦で  
神道と儒教を失って  
従うべき倫理基準を  
無くしてしまっている

代わって

従うべきは  
権利ばかりを書いた  
現行憲法と  
それを支える  
民主主義の思想のみ  
権利（人権）を  
主張するのなら  
欧米にあるような  
絶対な神の義を行う  
人の義（人義）を  
前提せよ  
平等を言うなら  
絶対な神の平等たる  
義務の平等を言え  
世界がいま  
取り戻すべきものは  
四聖の教えに従って  
喜んで果たす  
絶対な義務

例えば

それは  
四聖の一人・釈尊の  
次の教えに従うこと

悪を為すな（自）  
善を為せ（他）  
心を磨け（己）

不殺生（無暴力）  
不偷盗（無搾取）  
不邪淫（無買春）  
不妄語（無陰謀）

布施（無財七施）  
持戒（五戒十戒）  
忍辱（仁徳謙讓）  
精進（向上修行）  
禅定（瑜伽瞑想）  
智慧（教説習得）

これだけを守っても

たちどころに

あらゆる差別はなくなり

この世に平和が訪れること

間違いなし

フランスの

義務中心主義の憲法が  
すぐ

権利中心主義の憲法に  
改正された理由が

やっと分かった

それは

フランスには

聖書が生きていて

義務をいう必要が

なかったから

民主主義を広めるには

権利をこそ

言わなければ

ならなかったということ

**三児の魂？**

梅檀は

二葉より芳し

三児の魂

百までも

三才にして

親に反抗し

唾をまく子らの

将来は？

**愛情なきしつけ**

愛情を

欠きたるしつけ

危険なり

さらに虐待

増加さすだけ

**警官も悪に染まる**

警官も

悪に染まっつて

悪をなす

相對だけの

ご時世だから

**忘れて生きる**

何でも

忘れる

生きていることさえも

忘れて

ただ生きている

**一一世紀は明治の延長か**

明治のキャッチフレーズ

富国強兵

殖産興業

この延長線上に

しかない

一一世紀懇の答申

**教育の立て直し**

教育を立て直すには

崩壊した

家庭を立て直し

地域を立て直し

学校を建て直し

なければ

# 自作随筆選

## 耳ふさぐ親たち

毎日新聞に「子どもが危うい 第一部 からだ」と題する連載記事が、載りました。その第一部の最終回は、「耳ふさぐ親たち」と題するものでした。

その記事の中に、私が感じていた現代の母親たちのころのあり方が、とうとうそこまでいつているのかと、驚かされるものがありました。それは、次のような記述です。

ある母親の声「子どもが大声で騒いだ時は、時々ウオークマンを聞いているの。子どもの声のポリウムが下がって、イライラせずに接することができるわ」。

母親向け月刊雑誌の編集長の声「以前の母親は、幼い子どもに自分を合わせていた。ところがこのごろは、自分の欲求を満たしたいとの思いが強くなっているように見える」。

その他、寝返りを始めたわが子を見て、「モゾモゾして虫みたい」と気持ち悪がる母親や、「バタバタ動いておむつを替えづらいと、頭に段ボール箱をかぶせて暗くし、

こわがらせておとなしくさせます」という母親の例などが上げられています。驚きです。

ずっと以前、子どもをお腹に宿すことは、まさに如来さまを蔵したこと（如来蔵）なのだということを、ある女性アルコール依存症の方を例にあげて述べたことがあります。

私は、これは何もその例の方だけではなくて、女性の方の妊娠はまさに、イエス・キリストの母マリアさまが神の子を身ごもつたとされていますように、誰でもが、仏さまの授かりものを宿したのだと思っっているのです。

女性は、ありがたくも仏さまの子を宿し、仏さまを産むのです。なのに、今では誰もそう思っていないようです。悲しいことです。

仏さまは愛（慈悲）の権化です。女性とは、そうした愛の権化になりえる素質を備えた存在だと思っのです。私は、女性は全てを産みだす大地で、「他己」的存在だと思っいます。それに対して、男性はそこからはみ出した存在で、元来「自己」的です。いま、人類全体から「他己」が失われ、皆が「自己」的存在になっています。残念でなりません。「女性よ、女性らしさを取り戻せ」と言ったいと思っいます。子どもを産んで、愛を、人間らしさを取り戻して頂きたいと思っいます。

## ペット飼育の大隆盛

いま、日本人の大多数が、ペットを飼っていると思えるほど、ペットの話題が新聞やテレビをにぎわしています。その対象は、犬や猫にはじまって、魚類や鳥類、類人猿はいうに及ばず、爬虫類や猛獣までもが、ペットとして飼われています。しかし、他方では、それにもなつて、動物虐待へと動物を愛護していると称する人が思っている)もよく問題となります。最近も、動物を愛護すべしとする法律が制定されました。また、絶滅しそうな動物を保護しようという実践も多くなされています。トキの保護はその典型です。また、港に迷い込んだクジラの保護や見物も評判になります。

こうした背景があるのか、二月六日の書評欄に宇都宮直子著『ペットと日本人』(文春新書)が紹介されました。そこには、日本では現在、ペットが家族の一員のように扱われることが多くなつたことが書かれています。そして、この背景には「根底に流れる現代の対人病理」があるのだ、といえます。

ペットと人間との関わりの特性を書いた文章に、次のようなものがありました。

「ペットは裏切らない。飼い主を捨てない。飼い主を脅かさない。安定した愛情を飼い主に向け、飼い主に頼りきっている。でも手間をかけさせないし、飼い主より強くなることは永遠にない。」

私は、この文章を読んで、まさにこれは、現代人のように自己肥大・他己萎縮に陥っている者が、他人に対して求めても、求められないものだと思いました。

自分はこの逆を平気とする、つまり平気で「他者を裏切る。他者を捨てる。他者を脅かす。安定した愛情を他者に向けず、他者を信頼しない。でも、他者が自分には配慮してくれることを求め、他者より優越することを望んでいる」のです。でも自分は逆を他者に求めています。こうなりますと、この世はますます、かさかさになって来るのではないのでしょうか。いま、そうなっていますが。

世間では、いま、人間の動物化、動物の人間化、人間の物化、物の人間化が起こっています。

動物の肉は平気で食べるのに、自分の好きな動物が殺されたりしますと、すごく情動的になります。それが相対な基準であることに気づきません。平気で他人をペットのように監禁したり、殴ったり、殺したりします。自動車の部品を取り替えるように臓器を取り替えます。遺伝子进行操作し、人間改造を目指します。遺伝子という物

を調べれば人間（精神）が分かると狂信します。

いつか書いたことがあると思いますが、有名な女性の家族社会学者が、あなたにとって子どもや夫は何ですか、と問われて、しばらく考えたのち、「さあ、ペットみたいなものですかねえ」と応えたことがありました。いま人間がペット化し、ペットが人間化しているのは確かです。

ペットと人間の混同は、ペットのように人間を扱うことを意味します。先程あげましたペットに求めるものが満たされませんと、平気でペットを処分します。それは、人間にも拡張されて行きます。

また、病気になった人間を故障した自動車でも直すように、部品（臓器）を取り替えて直します。それは、人間のまさに物化を意味します。物ならば、壊そうが、捨てようが、こころの痛みを感じることは全くありません。最近の、常識を超えた異常としか考えられない犯罪は、その同じ延長線上にあると思えるのです。

自己に閉じて、他者の痛みも悲しみも、もちろん、喜びも感じる事ができなくなってしまうています。自分の欲望や情緒が何にもまして最優先されるのです。

これは、何も個人レベルだけの話ではありません。国会会社も政党も、社会全体が皆、そうなっているのです。

## 釈尊のことば（八九）

法句経解説

（三〇一）ゴータマの弟子は、いつもよく覚醒していて、その心は昼も夜も瞑想を楽しんでいる。

「ゴータマの弟子は、いつもよく覚醒していて、昼も夜も」シリーズの最後です。今回は、「瞑想を楽しんでいる」ということです。

では、瞑想とは何なのでしょう。分かっているようで分からないことばのようにも思えます。少し調べてみたいと思います。

この瞑想は冥想とも書きますが、この冥（みょう）は、中村元著『佛教語大辞典』（東京書籍刊）によりますと、「闇黒（あんこく）。くらやみ。無知にたとえることから、無知と同義語として用いられる。仏はこの闇黒なる無知を滅したものとされる。」とあります。また、鎌田・米山著『大漢語林』（大修館書店刊）によりますと、「くらしい。ア奥深く光がなくて暗い。イ道理にくらしい。知識がない。おろか。よる。くらやみ。ふかい。奥深い。奥深いところ。知覚の及ばないところ。ア空。天。イ海。ウ地下。また、よみじ。あの世。死後の世界。」

エ神・仏のはたらき。(以下略)。」とあります。

ということとは、冥想とは「冥を想(おも)うこと」という事ですので、こうしたことを想うことだと言えます。

私の理論では、宗教としての神や仏のような聖なるものは、深層である無意識に潜んでいると考えています。無意識ということは、意識できないということですので、上層にある意識の働きとしての「認知・言語」では、知ることができない領域と言えます。そういう意味で無知なのです。こうした闇黒なる無知を滅することが冥想であり、その方法をも冥想と呼んでいるのです。

ということとは、宗教の修行方法が冥想だということになります。仏教には、大きく分けて二つのやり方があります。一つは、禅宗で行う坐禅のように、意識の全てを滅してひたすら冥想する方法で、もう一つは、真言密教で行う「修法(しゅほう)」のように、ひたすら、私のいう「自己」を滅して、「こころ(感情)」に仏を想い(観想という)、「からだ(運動)」で印を結び、「あたま(言語)」で仏の真言を唱える方法です。因みに、これらは、共にインドのヨーガに含まれるものです。ヨーガは「行う宗教」ですが、そこには、呼吸法、体位体操、観想法などが確立しています。

また、浄土宗などで行われる、阿弥陀如来を観想して、

ひたすらお数珠を繰りながら、その名号(みょうごう)である「南無阿弥陀仏(なむあみだぶ)」を、一日中、唱え続けるのも一つの冥想方法です。それは、真言密教で行う虚空蔵求聞持法とそっくりです。

このように、冥想は、意識そのものを「滅して」、あるいは、自己を「滅して」、ひたすら無意識の統合を目指して行う修行方法だということです。

この偈では、ゴータマ(釈尊)の弟子は、こうした冥想を昼も夜も楽しんでいて、とうたっています。

皆さんも、どの方法でも結構ですから、毎日、毎日、十分でも二十分でも、ひたすらお続けいただきたいと思えます。そうしないと、人格の完成なぞ起こり得ませんし、真の幸せは訪れてきません。ということは、真に人を幸せにすることもできないということです。

(三〇二) 出家の生活は困難であり、それを楽しむことは難しい。在家の生活も困難であり、家に住むのも難しい。心を同じくしない人々と共に住むのも難しい。(修行僧が何かを求めて)旅に出て行く  
と、苦しみに遇う。だから旅に出るな。また苦しみに遇うな。

この偈の前半は、出家でも在家でも、生活は困難であり、また、心を同じくしない人々と共に生活するのも困難である、ということですが、何を主張しようとしているのでしょうか。

一つは、生活が困難である人への慰めの言葉として言われたものだということです。多くの人は、生活が楽であることが、人生の目的になっていきます。そうした人は、困難に出会うと、生きる望みすら失ってしまうこともあります。そうした生きる望みを失いそうになっている人に対して、人生というものは、もともと困難なものなのですよ、と諭しておられるものと解釈できます。

また、そういう、人生が思いどおりに行かないことをよく自覚することが、真の幸せにいたる出発点なのだということを言っているとも受け取れます。

それは、後半の「(修行僧が何かを求めて)旅に出て行くと、苦しみに会う。だから旅に出るな。また苦しみに会うな。」という部分にも関連しています。つまり、人生の苦を厭うて出家している修行僧は、すでに、出発点には立っているのですから、もはや旅に出なくてもよいし、苦しみに遇わなくてもよい、とっておられるのです。そんな苦しみに会う間(ま)には、修行をひたすらしなさい、ということなのです。

人間は、修行僧に限らず、旅に出て、見聞を広めたくらいでは、幸せにはなりません。幸せになるためには、自分の外を探すのではなくて、自分の内なる無明(闇)を明らめなくてはならないのです。

ところで、少し話がそれますが、この偈の「心を同じくしない人々と共に住むのも難しい」ということが、今日ほど、問題になっている時もないのではないかと思えます。

毎日のように新聞の国際面をにぎわすのは、民族と宗教の対立による紛争です。それも、テロを含んだ暴力による戦いです。

釈尊の仰るとおり、確かに「心を同じくしない人々と共に住むのも難しい」のですが、でも、それが現状認識をうながす慰めのことばとしてなら、意味がありますが、その解決のためにはどうすればよいかは示されていません。勿論、目指すものは自己への執着を捨てて、誰とも仲良くすることなのですが、そのためには、どうすればよいのでしょうか。

私は、いま、それを聖徳太子の説かれた「和」の精神を基本にしてはどうかと考えています。

その考え方の根本にありますのは、私たちは相対な存在者である「凡夫」だという自覚をもつことです。それ

は、誰でもが、善いところもあれば悪いところもある、ということなのです。そうすれば、お互いに譲り合うことができる、ということなのです。これは、現在の民主主義の考え方とはまったく異なった原理といえます。折にふれて書きたいと思っています。

(三〇三) 信仰あり、徳行そなわり、名声と繁栄を受けている人は、いかなる地方におもむこうとも、そこで尊ばれる。

これは、まさに釈尊ご自身のことを仰っているように思われます。

でも、法が滅してしまつた現在では、なかなかこうはいかないようです。例えば、マザー・テレサは世界的には尊ばれていますが、日本ではそうではなかつたようです。日本に來られて、日本を去つて行かれるとき「日本ほど障害者の住みにくいところはない」と言われたと聞きます。それは、マザー・テレサご自身が尊ばれなかつた、ということを意味しているのではないのでしょうか。

随筆「ペット飼育の大隆盛」でも書きましたが、いま、日本人は多かれ少なかれ、ペットが示す飼い主への忠誠心や愛情や信頼を自分は欲しがっているのに、他者に対

しては奪うだけで与えていなのです。

私自身のことで恐縮ですが、私は、人がペットに求めているものを、私自身は求めませんが、人さまには差し上げたいと思っています。それは忠誠心であり、愛情であり、信頼です。また、誰に対しても優越欲を持たず、誰かからの世話にならなければならなくなつて手間がかかるようになつたら喜んで「お迎え」を受けたいと思っています。でも、日本では、私の勤める大学は言うに及ばず、こうした心が通じない人が大多数になつてしまつています。悲しいかなです。

それは、人々から信仰がなくなり、倫理が失われて徳行の価値が廃れてきたことを意味しています。日本では元来、建前よりも自分を制して人を立てる「仁」が尊ばれ、それによつて社会秩序が保たれてきました。でも、いま、日本人は信仰や倫理観を失い、仁や徳の価値を失つて、根無し草になつています。どこにも自分を支える足場がありません。自分自身のあたまの上に自分が立つているようなものです。これは、「信仰を欠いた民主主義」です。いつ倒れるかは時間の問題のように思えます。

自己の肥大ではなく、自己を捨てる宗教を説く人を尊び、徳や仁の価値を身につけた人の名声が高まり、繁栄を受けるような社会を取り戻さなければなりません。

後記

- 一、寒い日が続いています。風邪もはやっているようです。お気をつけ下さい。
- 二、昨年の十二月号で、学習障害児の研究について紹介しましたが、それを修士論文に、神奈川県から派遣されています現職教員のゼミ生・小川敦君がまとめました。
- 三、その後、小川君が中心となつて、今後の研究のために、全国の都道府県五十一カ所の学習障害児親の会支部に、開発しました十尺度からなる質問紙の実施の協力をお願いしましたところ、予想以上のご協力が得られ、今のところ二百部余りが、返送されて来ています。
- 四、それを見ますと、親御さんはとても悩んでおられることが分かります。多くが学校の対応の悪さに不満を持たれています。先日発表されました文部省の定義は「認知障害説」に基づくものですが、これでは、こうした悩みに全く応えられないと思います。
- 五、今年は、私も、こうした親御さんたちの悩みにお応えするために、学習障害児の電話相談をしなければならぬのではないかと、思ったりしています。
- 六、いま、畑仕事は、ほとんど何もしていません。ほうれん草や大根は必要に応じて収穫しています。種から蒔いたキャベツを苗床から移植しましたが、寒さにも負け

ず、少しずつ育っています。また、ニンニク、エンドウ、も同様に春を待つかのようにじっと耐えています。でも、時期を外したのか、廿日大根は大きくなりません。

七、畑に果樹を徐々に増やしています。いまは、ビワ、柿（以前から植えてあったものを剪定した）、イチジク、みかんの小夏、ぐみ、などが植えてあります。また、やまももや、しきみも植えてあります。

八、ご縁を頂き、二月七日に、阿南市立の横見保育所で、「心を育む子育てとは」と題して講演させて頂きました。皆さんが熱心に聞いて下さり、質問も多くして頂きました。ありがとうございました。

月刊 こころのとも 第十一巻 二月号 (通巻 一一二二号)	平成十二年二月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>よしと</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと と 口座番号 01610 8 38660	

